



ぼくが何なのか、
それはそのうちわかるはず



ミナミ ユイ

ぼくの友だちは、産まれてすぐに食べられました。

ぼくの友だちの双子のお兄ちゃんは、産まれることすらできませんでした。

ぼくの友だちの友だちの友だちは、おうちから出られなくなったそうです。あれ？ おうちごとなくなったんだっけ？

まあいいや。

ぼくはというと、一生懸命ご飯を食べて、少しずつ、少しずつ大きくなりました。

大きくなってからも、友だちはどんどん減りました。

どんどん大きくなったぼくは、なんだかとても眠たくなって、すてきなおうちを探しました。

すてきなおうちはすぐに見つかりました。

静かで、やわらかくていい匂いがして。

ひんやりしていてあったかい、それはそれはすてきなおうちです。

ぼくはそこで、ゆっくりと眠りました。

目が覚めて、ぼくはゆっくりと外に出ました。

なんだか眠る前とは違っている気がしましたが、大人になったんだなどだけ思いました。

外に出ると、友だちがいました。そこにいる友だちは、みんな大人になっていました。

みんな、眠る前とはまったく違う姿でした。

きっとぼくもみんなと同じ姿になっているんだろうなと思いました。

そしてすでにそこにいた友だちに負けないように、よりすてきに見えるように一生懸命輝きながら、伴侶を待っていました。

ある夜。月のない、静かですてきなあの夜。あの人はやってきました。

「うわあ、きれいねえ」

あの人はそう言って、ぼくのことを目で追っていました。

もしかしたらぼくのことではないかもしれないとも思いましたが、ぼくがあっちに行けばあっちに、こっちに行けばこっちに顔を動かしていたので、きっとぼくのことをきれいだと言ってくれたのでしょう。

あまりに嬉しくて、ぼくはあの人のところへ飛んで行きました。

だって、どれだけ努力していても、ぼくのところへは誰も来てくれなかったのです。

だからそんなぼくのことを「きれいだ」と言ってくれたあの人に、触れたくてしかたがなかったのです。

「あ、こっち来た！」

近づくぼくに気づいたあの人は、柔らかそうな手のひらをぼくに向けました。

警戒していなかったわけではありませんが、ぼくはついついあの人の手に触れてしまったのです。

それがいけなかったのでしょうか。

ぼくはあっという間にあの人に捕まってしまったのです。

夜よりも濃い闇の中で、ぼくはどうしていいのかわからずにいました。

ただただ右往左往し、立ち止まり、困り果て、どれだけの時間が経ったのかもわからず、けどただ、自分がこのままこの人の手の中で、ゆっくりと死んでいくんだろうなと思いました。

けどそんなとき、声がしたのです。

その声が何と言ったのかはわかりませんでした、ぼくは再び外に出ることができました。

誰がぼくを助けてくれたのかと振り返ってみると、そこには少し悲しそうな顔をしたあの人と、少し嬉しそうな顔をしたその人がいました。

ぼくは外に出られたのが嬉しくて、外に出してくれたお礼がしたくて、いつもよりももっとがんばって輝きました。

あの人は、やはりじっとぼくだけを見てくれていました。

「きれいねえ」

そう言ったあの人は、とても嬉しそうでしたが、すぐにまた少し悲しそうな顔をして言いました。

「すぐに死んじゃうの、かわいそうね」

それがどういう意味か、ぼくにはわかりませんでした。

それからすぐに伴侶は見つかり、ぼくらは結ばれ、子孫を遺すことができました。

その多くは産まれてすぐに食べられ、産まれてくることもできず、あるいはおうちごと失われてしまうのだらうと思います。

それでも子孫を遺せたことは、ぼくにとってとてもしあわせなことです。

だっていつかまたあの人がここに来て、ぼくの子孫を見て、また嬉しそうに言ってくれるかもしれませんから。

「きれいねえ」って。

*

ぼくの友だちは、産まれてすぐに食べられました。

ぼくの友だちの双子のお兄ちゃんは、産まれることすらできませんでした。

けどそれは仕方のないことです。

ぼくの友だちの友だちの友だちは、おうちから出られなくなったそうです。

あるいはおうちごと失われてしまいました。

そしてそれは、人のせいでもあるのです。

「きれいねえ」と言ってくれたあの人が。

闇からぼくを助けてくれたあの人が。

ぼくらの子孫が生きていけるよう、ほんの少しでも努力をしてくれれば。

そしてその努力を、もっとたくさんの方がしてくれれば。

ぼくらの子孫たちは、ぼくらよりももう少したくさん生きられるかもしれません。

fin.